



又 5
177

又 5
474



Main body of handwritten text in a cursive script, possibly a historical record or account. The text is densely packed and includes various names and dates.



Handwritten Chinese text in vertical columns, including characters like 水, 山, 松, 竹, and 梅. The text is arranged in a calligraphic style, with some characters appearing in larger, more prominent forms. The text is written in black ink on aged paper.



Small vertical text or stamp at the top left of the second page.

Extensive handwritten text in cursive script, likely representing a letter or a long inscription. The text is written in black ink on aged paper and is arranged in vertical columns.



年月多有人編輯
轉々主人補闕



赤穂 烈女 傳

明治 四年 八月 補刊
東京 文永 堂 刊



古人曰諸葛孔明が出師の表を讀んで涙を不下者ハ必不忠の人ナリト云
と。赤穂の忠臣大石良雄が遺書祭文を讀んで大義明分を知者ハ誰カ
歎き憐まふト云。之が遺族ハ至るも亦此節婦烈女アリ。友人山々亭
有人子ハ常ニ義と重んじて義士の事蹟を探ると好之。此書以
編集して刻成の後ハ剽賊家祝融の災ハ罹て卷首の二丁と灰燼
となり。後仍て版元文永堂主人再び著者小稿を乞はるも繁忙
ありしに昔れ糸バ子ガ好古の癖ありしを知り。卷端の一丁を補ひ
しよと請ふ。依小筆と寒夜の燈下ハ走らせ。有の儘と序文ハ換ふ。
時ハ明治十三年十二月十四日。義士ガ復讐の當日より百七十
有九年なり。

京橋の隠士 轉々堂主人



文武の車の両輪の如く忠孝の道も又然り
 内蔵之助の能く四十七歳に
 勵ましく復讐の謀り妻
 子や但州豊岡の實家石束
 氏小抱一獨長男主税や山科
 の閑居に留め君恩を地下に報
 ざる爲に死を勸む然れども
 之を父子の愛情より一時の
 未だ十五歳の少年なれば甚だ
 傷み惜めども不義の事
 生を替り汚名を千載に遺



百世に舉よ是却て吾が汝成
 愛まる情の深き所なりと
 諭せば主税欣然として我
 若年なりと雖も聊大義の道
 知まば死と潔くして父子國に殉ふの
 義士と稱されん事と希ふとありしに
 内蔵之助の其志を感して元禄十五年九月十九日
 盟約状の一卷を授け間瀬久太夫大石瀬左衛門等
 添へ關東へ先發せしめし楠公が櫻井の驛の訣別
 嗚呼忠臣ハ孝士の門不出ると真なる哉



右一章

轉々堂主人補記



吟光補圖

他師考義士と悼むの燕々

竹の葉の清濁
水間沾徒

うらひ



此かたし破り

宝井さ角

打ちまて

あがり

花よりか

活判



貞佐

鳥影の

あつた

初よりさ角



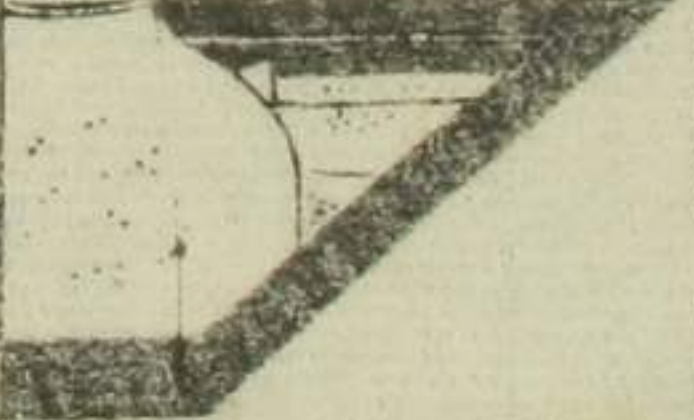
子兼居士とてこそ

白雲

白雲

丈長具茶全

白向山



辛子

二代め

拍送

あつた

活判



揺尾流夫人
氣をとる人よ

も

か

はれい
春の石を乃
いとどあはれ

いとどあはれ



長箱
死と
あつた

國家の長官...
あがり...
活判...

此女席の... 夫の... 義士の... 忠告の... 死と... 南寺... 世の... 衆の... くと... 死... 此女席の... 夫の... 義士の... 忠告の... 死と... 南寺... 世の... 衆の... くと... 死...



堀河のゆき清金丸妻
名はかんざし
母もあらわ
いと又金丸の妻のふりあつり

戸田の局
名はあけ
母もあらわ
いと又金丸の妻のふりあつり

名と幸とよみて海濱清浄
 御文の傍に寺のちう
 入るふも此の由人
 わくそ夜給物
 義士の増臺の積
 御文の傍に寺のちう
 入るふも此の由人
 わくそ夜給物
 義士の増臺の積

七十八歳
 ありてその方
 元氣の衰へ
 されしと
 ありてその方
 元氣の衰へ
 されしと



此の巻のついでに本所中のついでに
 一巻を返す意を自筆はしう

此の巻のついでに本所中のついでに
 一巻を返す意を自筆はしう



名の冊子同播灰方城の女に
 義氣風雅傑小吏小行死
 一冊小冊のまじりて
 十日教皇の後教通の婦
 名簿十六年二月二日の文
 通小せりて安後ありあり
 名簿のまじりて
 さうとん中さうとん杯の正と
 さうとん中さうとん杯の正と
 富自盡の流ハト小あり
 らとと解せとて中て自盡
 國寺のち中さうとん院小
 梅心院教皇日性信女之縁
 十二年二月十八日刻まると
 之



村松三太夫が難ありをり
 三平忠孝全きとほく
 冥文七郎左衛門が
 自害ありて
 主税が妻と云あり
 木下向ありたき
 其の身妻と見抜
 しては戸へて
 神麻が
 奉る
 されバ上野
 事
 幸一
 せーとる



山岡屋三郎清が娘名を海と
 のり、娘は清の屋敷にありて
 終ひぬまゝの巻の巻にありて
 俣おせざる小主家、過持おか
 たり、父母の京師おのりて
 三平少妻と云あはせ、山岡お
 飛つては、戸下向とわい、お
 むら、いとうけては、おあは
 母が、おはしとて、おあは、
 あり、おと、おと、おと、
 あら、おと、おと、おと、
 意、おと、おと、おと、
 と、おと、おと、おと、
 対、おと、おと、おと、
 る、おと、おと、おと、
 自、おと、おと、おと、
 十、おと、おと、おと、



大石屋三郎清の娘
 主税が屋敷前江
 手解らるる

名を、おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、
 おと、おと、おと、



大石屋三郎清の娘
 主税が屋敷前江
 手解らるる

九節... 堀浦... 二人... 義の... 藤... 連... 金... 妻... 一生...

正... 堀浦... 二人... 義の... 藤... 連... 金... 妻... 一生...

大... 九... 清... 娘... 正... 因... 切... 服... 忌... 日... 謹...



富... 森... 助... 右... 清... 門... 正... 因... 切... 服... 忌... 日... 謹...



妙長殿の中下性を勤同出の
 も入るるし小野の神代りて
 まりるるまぶる衣帯の七か敷
 して欠る老を獲りしは時衣帯
 七十六月つらなれば後雁々
 く止むもさも強をたあ小神
 文るささも母たらもにせそ
 下らんじせすを女小野を
 里多れば流舟の園新を通
 ささむ時小野の舟小野の
 後ささむささむささむささむ
 赤穂にあらんぬささむささむ
 原と後養をささむささむささむ
 まか河を母入るるささむささむ
 小野の舟小野の舟小野の舟
 つまひかむささむささむささむ
 小野の舟小野の舟小野の舟
 夜長をささむささむささむ
 て自家をささむささむささむ



実勢未退退云の渡妻を
 洞小野とのなるささむささむ
 と修小野の舟小野の舟
 名とかり小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟
 小野の舟小野の舟小野の舟



十平治の身小僧人とのりとも
 其法不ら見くあるも 藤忠の
 士之阿蘇神海くゆれとて
 江戸中内の村十平治保子とて
 人らつらと 御旗金子二十両にて
 老母の身をかたつけたり 出立
 のはしと命じしは十平治母も
 村とのつらとて 御旗金子
 廿二両の夜とて 御旗金子

十平治の身小僧人とのりとも
 其法不ら見くあるも 藤忠の
 士之阿蘇神海くゆれとて
 江戸中内の村十平治保子とて
 人らつらと 御旗金子二十両にて
 老母の身をかたつけたり 出立
 のはしと命じしは十平治母も
 村とのつらとて 御旗金子
 廿二両の夜とて 御旗金子

横川勘平伯母



十平治の身小僧人とのりとも
 其法不ら見くあるも 藤忠の
 士之阿蘇神海くゆれとて
 江戸中内の村十平治保子とて
 人らつらと 御旗金子二十両にて
 老母の身をかたつけたり 出立
 のはしと命じしは十平治母も
 村とのつらとて 御旗金子
 廿二両の夜とて 御旗金子

横川勘平伯母



十平治の身小僧人とのりとも
 其法不ら見くあるも 藤忠の
 士之阿蘇神海くゆれとて
 江戸中内の村十平治保子とて
 人らつらと 御旗金子二十両にて
 老母の身をかたつけたり 出立
 のはしと命じしは十平治母も
 村とのつらとて 御旗金子
 廿二両の夜とて 御旗金子

意兵衛の妻の行田源若者
 婿より好意を清も同盟のそ
 人より... 義士の等討つりの
 内事... 義士の等討つりの
 青山下屋敷... 義士の等討つりの
 利髪の後の依るりとど



山屋寛之流妻
 今うらら
 家の命
 清らど

大高源若者... 義士の等討つりの
 文... 義士の等討つりの
 後... 義士の等討つりの
 て念解三味よ



おまを
 小の乃
 村松の
 村松三右衛門

法皇太子... 御前出陣... 寺と
 少少の... 唯七が...
 ありと... 何と...
 その... 何と...
 小大ひ... 何と...
 い... 何と...
 名... 何と...
 教... 何と...
 赤... 何と...
 能... 何と...
 何と... 何と...

武林唯七妻
 三十年...
 中
 取
 我...
 家郷...
 在...



法皇太子... 御前出陣... 寺と
 少少の... 唯七が...
 ありと... 何と...
 その... 何と...
 小大ひ... 何と...
 い... 何と...
 名... 何と...
 教... 何と...
 赤... 何と...
 能... 何と...
 何と... 何と...



橋座の花
 女の手
 揚の匂ひ...

京府種園町の妓女あり
赤穂の浪士城の大儀を
舞するあり故の風流を
歎しく保子あるあり
うらふ保子ありしを毛
いそむ向と極まりし時
士とてしうり利をば
新流流くおけりしを
甘や男もとりしおしを
して新しぬありして
後世の浪士年の春
をわらわしとありしを
をわらわしとありしを
をわらわしとありしを
をわらわしとありしを

哀れなる人あはれの
世を問ひつゝ
涙をせめ
形ももえん



大いなる遊園の遊園あり
て一子を養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり
を助世に養ふ九十歳あり



赤穂藩華岳寺の造主住持

造主住持

高は年次内毒申か家不徒
 奴婢うんごる老婦る老婦
 うれは権なき家室老母
 うれは権なき家室老母
 うれは権なき家室老母
 うれは権なき家室老母
 うれは権なき家室老母
 うれは権なき家室老母
 うれは権なき家室老母
 うれは権なき家室老母

菊屋赤雲清の
 妻さき
 懐ぞくの
 仕立も
 恩
 小菊
 袴ふ
 うるべ



高女小
 替り
 果けむ

史抄を清入書と云ふものあり
 小宮物に載るる我へ事不ありと
 目考入るは清入書のありき
 法つて史抄の誤載と判せしむ
 説を著る小紙は清入書に
 よつて載らるるは清入書の
 若しとらるとは清入書の
 子とて載らるるは清入書の
 のありきと判せしむ
 おもひに載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の
 書本に載らるるは清入書の

あぬのやうへなるの
 天祥屋利き清書
 さらけした
 袴
 や仕立
 初
 継



這ハ士齋
 晩年の吟

秋野三全寺町三全寺の住持存隆
 門の権威を尊と仰る。此の権威の
 為に日夜酒を飲まふりたるを小山
 道隆のまゝなと考へらひひきまや
 林原のつゝあきまのつゝあきま
 と勤めてその権威をまこととせし
 至るまゝ容疑の西條を執りて
 よらるる内膳のつゝあきまのつゝあきま
 伊向の前家將のつゝあきまのつゝあきま
 さのつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 門主のつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 ありとあるを訓へて其のつゝあきま
 をして其のつゝあきまのつゝあきま
 のつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 後のつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 世に傳らひいとせん



内膳助の妻
 まらん
 喜成まら
 子まら
 らねむ
 まら
 まら
 年の
 らねむ

道隆の
 良妻
 自ら
 作ら
 れる

鏡若町舟屋が絶なり新橋
 秋の権威を尊と仰る。此の権威の
 為に日夜酒を飲まふりたるを小山
 道隆のまゝなと考へらひひきまや
 林原のつゝあきまのつゝあきま
 と勤めてその権威をまこととせし
 至るまゝ容疑の西條を執りて
 よらるる内膳のつゝあきまのつゝあきま
 伊向の前家將のつゝあきまのつゝあきま
 さのつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 門主のつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 ありとあるを訓へて其のつゝあきま
 をして其のつゝあきまのつゝあきま
 のつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 後のつゝあきまのつゝあきまのつゝあきま
 世に傳らひいとせん



今あき
 別色と知
 あつたの
 憂成る
 伏見妓女夕霧

老實に言ふに、我々の世に於ては、
 のちの世に於ては、
 雅くして高き道あり、
 抑えても、
 とて、
 海人、
 一、
 女、
 義士、
 その

此の世に於ては、
 のちの世に於ては、
 雅くして高き道あり、
 抑えても、
 とて、
 海人、
 一、
 女、
 義士、
 その



